長野市の埋蔵文化財第 170 集

浅川扇状地遺跡群

相木城跡・長野女子高校校庭遺跡（2）

――学校法人聖啓学園長聖小学校新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

2023 年 10 月

長 野 市 教 育 委 員 会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第170集として刊行いたします本書は、学校法人聖啓学園長聖小学校新築工事に伴って実施した、相木城跡・長野女子高校校庭遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、弥生時代や古墳時代の住居址などが検出されており、この地にかつて展開した原始・古代の集落を考察するうえで重要な資料が得られております。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

2023年10月

長野市教育委員会
教育長　丸山陽一

例　言

1　本書は、「学校法人聖啓学園長聖小学校新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査地は、長野県長野市三輪九丁目 34 番外に所在する。調査面積は 337 m^2 である。

4　発掘調査は、令和 4 年 8 月 23 日から 10 月 3 日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は令和 5 年度に行った。

5　本書の編集・執筆は千野　浩が担当した。

6　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は、「AAKJ」である。

凡　例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

1　本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。

2　遺構図の方位は座標北を表している。

3　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 138°30′00″、北緯 36°00′00″）の座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。

4　遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴住居址…SB、溝址…SD、土坑…SK、建物址…ST

5　遺構実測図は、1/20 で作成した原図をもとに、竪穴住居址・溝 1/80 で掲載した。

6　遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器 1/4、土器拓本 1/3、石器 1/3 で掲載した。

7　遺物写真の縮尺は任意である。

8　土器実測図において、断面の ■ は須恵器を表す。また、器面の □ は赤色塗彩の範囲を表す。

目　次

第１章　調査経過 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査の体制 …… 2
第２章　調査地周辺の環境 …… 4
　第１節　調査地周辺の地形 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5
　第３節　相木城跡について …… 7
第３章　調査成果 …… 9
　第１節　調査概要 …… 9
　第２節　遺構と遺物 …… 11
　第３節　調査のまとめ …… 17

挿図目次

図１　調査地位置図 …… 1
図２　調査地周辺遺跡分布図 …… 6
図３　相木城跡 …… 7
図４　旧公図に見る相木城跡 …… 8
図５　調査区全測図 …… 10
図６　土層柱状図 …… 10
図７　１号住居址実測図 …… 11
図８　２号住居址実測図 …… 12
図９　１号建物址実測図 …… 13
図 10　２号建物址実測図 …… 13
図 11　土壙実測図 …… 15
図 12　出土遺物実測図 …… 16
図 13　調査区位置図 …… 17
図 14　１次調査・調査区全測図 …… 18
図 15　調査区西半全測図 …… 19
図 16　調査区東半全測図 …… 20

表目次

表１　検出遺構一覧表 …… 19
表２　出土遺物観察表 …… 20

写真目次

写真１　重機表土剥ぎ作業 …… 2
写真２　作業風景 …… 2
写真３　調査地全景 …… 3
写真４　調査地遠景 …… 4
写真５　昭和 28 年撮影航空写真 …… 8
写真６　土塁・堀痕（南側） …… 8
写真７　土塁・堀痕（東側） …… 8
写真８　調査風景 …… 9
写真９　１号住居址 …… 11
写真 10　１号住居址炭化材検出状況 …… 12
写真 11　１号住居址覆土堆積状況 …… 12
写真 12　１号住居址出入口施設 …… 12
写真 13　２号住居址 …… 12
写真 14　１号建物址礎石検出状況 …… 14
写真 15　２号建物址 …… 14
写真 16　１号土壙 …… 14
写真 17　７号土壙土器出土状況 …… 17
写真 18　調査区全景 …… 21

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過

長野女子高等学校は、1925（大正 14）年に長野和洋縫裁女学校として設立され、当時は現在の長野県庁前に校舎が建てられていた。1957（昭和 32）年には長野女子高等学校と改称し、現在の長野市三輪に移転した。さらに 1967（昭和 42）年に学校法人長野家政学園として法人化した際に、姉妹校である長野女子短期大学も開学し、伝統ある女子教育の場としてその後も発展を続け、2004（平成 16）年 5 月 21 日に創立 80 周年を迎えている。2013（平成 25）年 4 月からはグラウンドに建設した新校舎に移転し、旧校舎のあった場所はグラウンドへと改修された。

2022（令和 4）年 5 月、学校法人長野家政学園は、特色と魅力ある教育をより一層展開し地域社会に貢献していくために、学校法人聖啓学園と合併することを発表し、2023（令和 5）年 4 月から学校法人長聖と改称することになった。これに伴い、2024 年 4 月に長野市において小学校と中高一貫校を新設することになり、長野女子

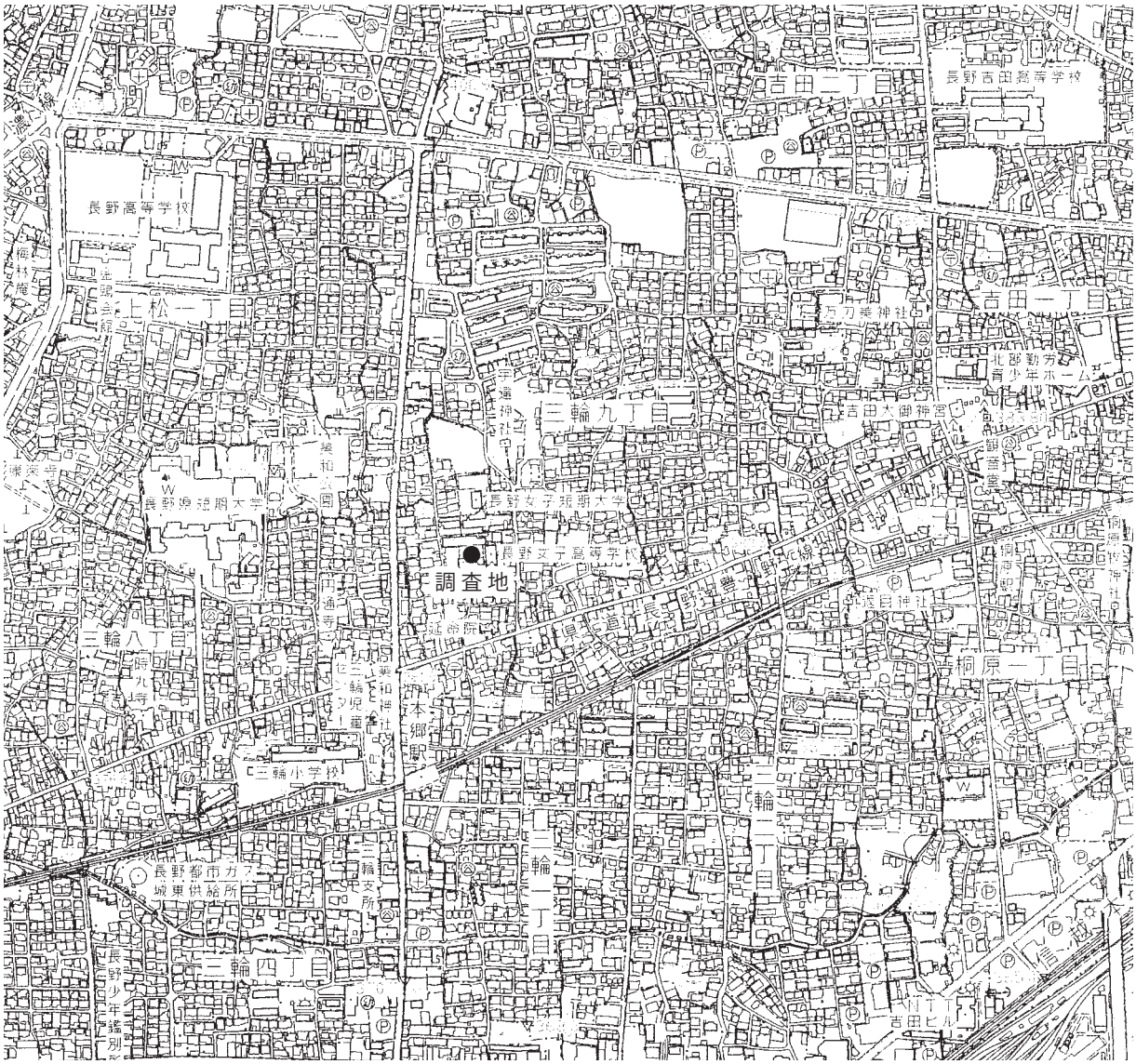


図１　調査地位置図（1：10,000）

高校は2026（令和8）年3月末に閉校する予定である。

小学校を新設するにあたり、現在グラウンドとなっている相木城跡が建設地の候補として計画され、2022（令和4）年4月に設計を担当している株式会社宮本忠長建築設計事務所の担当者が当センターに来所し、埋蔵文化財の保護に関する協議がスタートした。長野市教育委員会（以下、市教委）としては、2011（平成23）年6月20～22日に旧校舎解体工事に伴う試掘調査を実施し、2013（平成25）年6月3日には現グラウンド造成工事に伴う試掘調査を実施している箇所であり、一部に破壊を受けているとはいえ埋蔵文化財の存在は確実視される場所であることから、記録保存を目的とした発掘調査の実施は不可避であることを説明している。その後幾度かの保護協議を経て、2022（令和4）年7月7日付で文化財保護法第93条の規定に基づく届出が開発事業主体である学校法人聖啓学園理事長（以下、理事長）から提出された。市教委からは同月26日付4埋第2-133号にて「発掘調査」の保護措置を指示している。

写真1　重機表土剥ぎ作業

その後発掘調査の実施に関する打ち合わせを経て、同年8月4日付で理事長と市教委教育長との間で「埋蔵文化財の保護に関する協定書」を締結し、同日付で令和4年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を理事長と長野市長との間で締結した。

発掘調査は令和4年8月23日から現場作業を開始し、同年10月3日をもって現地におけるすべての作業を終了した。その後、2023（令和5）年　3月10日付で委託費を減額とする「埋蔵文化財発掘調査委託変更契約書」を締結し、同年3月15日付で「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を理事長あてに提出し、令和4年度分の業務を終了した。

写真2　作業風景

令和5年度は4月3日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、本書の刊行に至った。

第2節　調査の体制

調査は長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長　丸山　陽一
総括責任者		教育次長　藤澤　勝彦
総括担当者	長野市教育委員会文化財課	課長　前島　卓（令和4年度）
		課長　石坂　陽子（令和5年度）
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長　大井　久幸（令和4年度）

	主幹兼所長	飯島　哲也（令和５年度）
調査担当者	課長補佐	飯島　哲也（令和４年度）
	課長補佐	風間　栄一
	所長補佐	伊藤　慶順（令和５年度）
庶務担当者	事務職員	宮本　博夫
		平林　満美子
主任調査員	研究員	千野　浩
調査員	主　事	小林　和子、鹿田　奨之
	研究員	青木　一男、田中　暁穂
		清水　竜太、井出　靖夫
		鈴木　時夫（令和４年度）
		山岸　龍二（令和５年度）、越志凪渉（令和５年度）

発掘調査員　向山純子

発掘補助員　後藤大地

発掘作業員　青山三枝子、植木義則、上原律江、金井　節、杉本千代、月岡純一、峯村茂治、峯山真由美
金子ポンティブ、宮澤弘子、江守久仁子

整理調査員　青木善子　市川ちず子　鳥羽徳子　半田純子

整理作業員　飯島早苗　清水さゆり　西尾千枝　待井かおる　宮島恵子　三好明子

測量業務委託　株式会社写真測図研究所

重機等現物提供　学校法人聖啓学園

関連工事請負者　飯島建設株式会社

写真３　調査地全景（上が北）

第２章　調査地周辺の環境

第１節　調査地周辺の地形

長野県の県庁所在地である長野市は県北部にあり、総面積 834.81 m^2、人口約 36 万 9 千人、約 16 万 4 千世帯の地方中核都市である（令和 4 年 10 月 1 日現在）。地形および地質的には中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約 1000 万～200 万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約 40 km、最大幅約 10 km、標高 330～360 m である。第四紀中頃に形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や、千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

飯綱山を水源とする一級河川浅川は、中曽根集落のある山間部を侵食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として長野盆地内に流入し、東南方向へなだらかに傾斜（1/45）する典型的な大規模扇状地を形成している。今回の調査地の所在する長野市三輪地区は、この浅川扇状地の扇央部に位置し、南東向きの緩やかな斜面で閑静な住宅街である。各種学校施設も集中している地区であり、長野電鉄本郷駅周辺だけでも、三輪小学校をはじめ、長野県立大学、長野女子高と同短期大学、旭幼稚園が所在している。JR 長野駅を中心とする市街地から交通至便な場所にあり、1950（昭和 25）年ころから公営団地や宅地造成、事業所も進出し始め、「三輪たんぼ」と呼ばれた長閑な田園風景はほぼ姿を消し、道路や街並みにその名残がみられる程度である。

写真４　調査地遠景

第2節　歴史的環境

三輪の地名は、10世紀に成立した『延喜式』神名帳に記載された水内9社でも筆頭に列せられている美和神社に由来するという。奈良県の大神神社を祖神として祭っており、国内各地に関連地名が残っている。

三輪地区の所在する浅川扇状地のほぼ全域が、周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群（遺跡番号：長野市A-①）」の範囲内となっている。長野市内でも最大の規模を誇る遺跡群であり、調査地が含まれる長野女子高校校庭遺跡・相木城跡もその構成遺跡の一つである。近隣には下宇木遺跡、美和公園遺跡、三輪遺跡、旭幼稚園遺跡、本村東沖遺跡などが所在しており、弥生時代後期から現代へと連綿と続く集落が一帯に展開していたことがわかる。昭和41～43年に分布調査を行った長野吉田高校地歴班の報告によると、調査地付近として本郷、SBC南、上宇木、東宇木、SBC西、返目、長野女子高等学校西、下宇木の各所から遺物を採集し、下水道工事中であった下宇木B遺跡の緊急調査も行っている。そもそも「長野女子高校校庭遺跡」の名称もこの時つけられたものと推測される。

浅川扇状地遺跡群にはこれまでのところ旧石器時代の遺跡は知られていないが、浅川を遡った飯綱高原には上ケ屋遺跡が存在する。縄文時代では、概ねの傾向として扇頂部付近で前期、扇央部付近で中期、扇端部付近で後期の遺跡が検出される例が多いようであり、それぞれ松ノ木田遺跡、檀田遺跡、吉田古屋敷遺跡などが確認されている。弥生時代はほぼ扇状地全域に集落が展開しており、本遺跡群の中核をなす時代といえる。それ以降、南向きの緩斜面と伏流湧水という生活しやすい立地条件によって連綿と集落が営まれ、それは現在まで継続している。以下、三輪地区を中心に調査地周辺の既往調査について瞥見する。

1　下宇木遺跡（下宇木B遺跡）

うずら幼稚園プール造成事業及び、公営住宅建設事業・市道拡幅改良事業に伴い平成2年度に調査された。弥生時代後期の住居址6軒、古墳時代中期～後期の住居址10軒が確認された。下宇木B遺跡は詳細な位置が不詳であるが、昭和43年下水道工事中に発見され、長野西高の笹澤浩教諭（当時）の指導のもと長野吉田高校地歴班によって緊急調査されたもので、溝址1本、土壙1基、土器集中区1か所などが検出されている。

2　美和公園遺跡

昭和58年度に長野市遺跡調査会が調査を実施したが未報告である。古墳時代中期の住居址1軒と、直径約25 cmを測る柱痕が残る柱穴が2基検出されており、大型の掘立柱建物址の存在が予想される。

3　三輪遺跡（1）三輪小学校地点

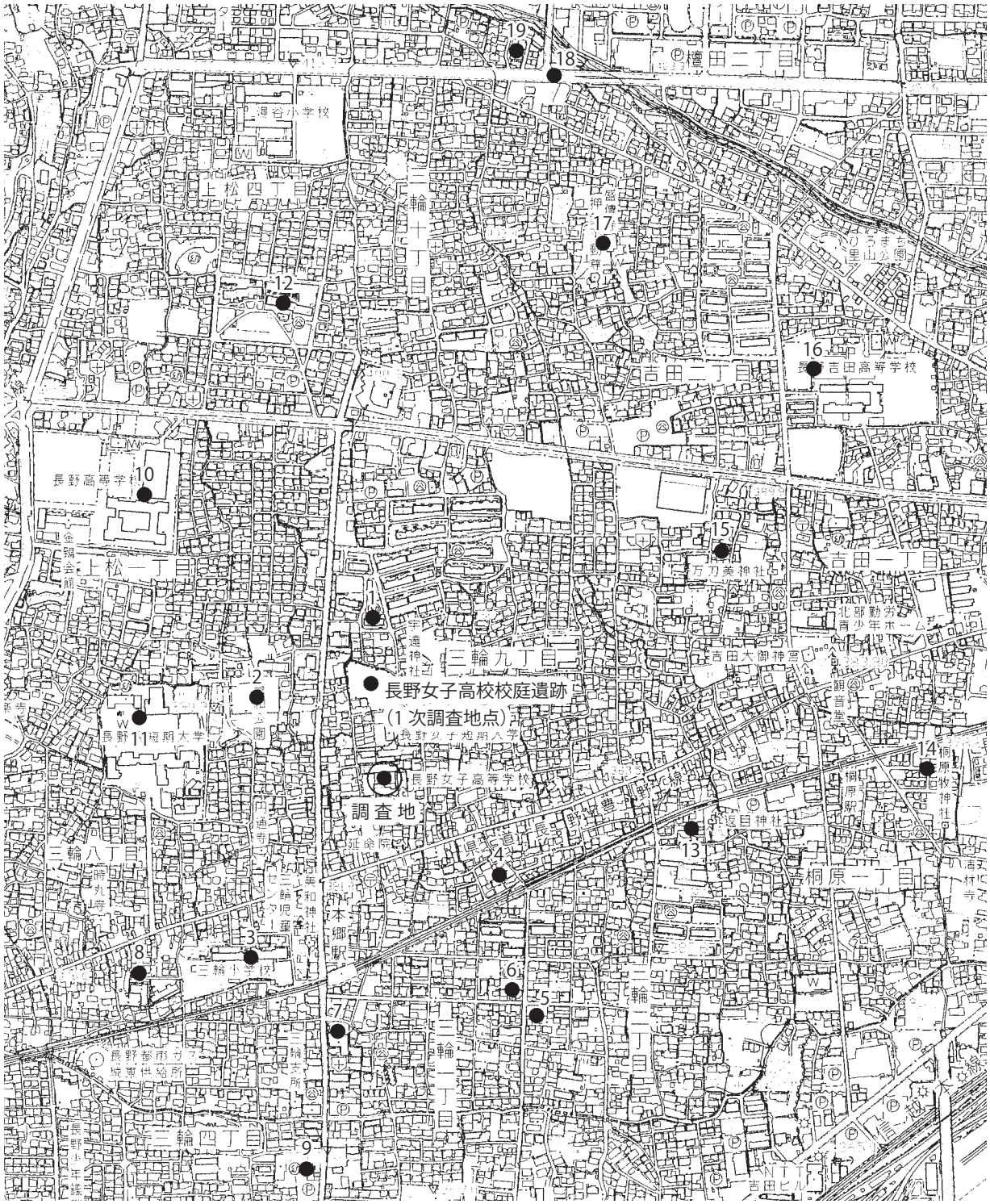
昭和50・51・53年度の3次にわたって合計約2200 m^2の発掘調査が実施された。1次調査では古墳時代後期の住居址2軒と時期不明な溝1本を確認した。古墳時代後期住居址の1軒は、一辺10 m前後を測る大型の方形住居で、床面からは建築部材と思われるおびただしい量の炭化材が検出された。2次調査では古墳時代中期と平安時代の住居址7軒と溝址2本が検出され、3次調査でも弥生時代後期および古墳時代後期の住居址7軒と土壙2基が確認されている。

4　三輪遺跡（2）長電本郷住宅地地点

昭和60年度に本郷住宅地造成事業に伴い調査された。発掘調査は道路造成部分の約450 m^2について実施し、古墳時代後期～平安時代にかけての住居址6軒、溝址4本、土壙1基を検出している。

5　三輪遺跡（3）国鉄本郷団地地点

平成2年度に約300 m^2を調査し、弥生時代後期の住居址2軒、古墳時代中期の住居址1軒、土壙1基、奈良・平安時代の住居址3軒、中世の土壙5基が確認されている。



1. 下宇木遺跡　2. 美和公園遺跡　3. 三輪遺跡（1）三輪小学校地点　4. 三輪遺跡（2）長電本郷住宅地地点　5. 三輪遺跡（3）国鉄本郷団地地点　6. 三輪遺跡（4）県職員宿舎地点　7. 三輪遺跡（5）滝沢マンション地点　8. 三輪遺跡（6）三輪保育園地点　9. 旭幼稚園遺跡　10. 本村東沖遺跡（長野高校地点）　11. 本村南沖遺跡　12. 本村東沖遺跡（上松団地地点）　13. 返目遺跡　14. 桐原宮北遺跡　15. 押鐘城跡　16. 長野吉田高校グランド遺跡　17. 盛伝寺居館跡　18. 浅川端遺跡（北部幹線地点）　19. 浅川端遺跡（団地造成地点）

図２　調査地周辺遺跡分布図（1：10,000）

6　三輪遺跡（4）県職員宿舎地点

平成 4 年度に約 900 m^2 を調査し、平安時代の住居址 2 軒、溝址 7 本、土壙 4 基、竪穴状遺構 2 基、柱穴列（掘立柱建物址）1 棟などが検出されている。

7　三輪遺跡（5）滝沢マンション地点

仮称滝沢マンション（サンディ・ココ）建設事業に先立って約 280 m^2 の調査を行い、弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址 1 軒、溝址 1 本、土壙 2 基、井戸址 1 基が検出されている。

8　三輪遺跡（6）三輪保育園地点

三輪保育園園舎改築工事に伴い、約 460 m^2 の発掘調査を行った。弥生時代後期住居址 1 軒、古墳時代前期住居址 1 軒、後期住居址 1 軒、奈良時代住居址 2 軒などが検出されている。

9　旭幼稚園遺跡

旭幼稚園建設現場で発見され昭和 42 年に調査が行われた。調査を開始した時点ではすでに遺跡のほとんどが破壊を受けた状態で、西南の隅の一部を調査できたにすぎない。住居址と想定される落ち込みが確認されたが、弥生時代中期末の土器が多量に出土し、善光寺平における当該期の基準ともなっている。

10　本村東沖遺跡

平成 3 年に長野高校校舎改築工事に伴い約 6800 m^2 が調査され、弥生時代中期住居址 3 軒、後期住居址 41 軒、古墳時代前期住居址 2 軒、中～後期住居址 56 軒などを検出した。弥生時時代の北陸系土器や古墳時代の子持勾玉・石製模造品などの出土が注目され、善光寺平におけるカマド初源期の集落として地附山古墳群とも関連付けられるなど、特徴的な調査例である。

11　本村南沖遺跡

新県立大学施設整備事業に伴い 6000 m^2 が調査され、弥生時代前期の墓址 1、弥生時代後期、平安時代の集落が検出されている。弥生時代後期の集落は後期前半吉田式期の集落で住居址 7 軒、掘立柱建物址 1 棟などが検出されている。

第 3 節　相木城跡について

相木城跡は平地に立地する典型的な居館跡として古くから知られてきたが、考古学的に正式な調査はこれまで実施されていない。『長野県町村誌』の上水内郡宇木村の項には、「村の南の方にあり、東西二十六間、南北二十一間、今田となる。東西北に土手あり、高さ二間、幅六間、外回りに堀を繞らす、南に追手あり、古老傳に武田氏の臣相木市兵衛在城すと伝ふ事跡不詳。」との記載がある。

『三輪郷土史』には昭和 8 年の調査で、「土塁の高さ約二間半（約 4.5 m）・幅二間で、土塁の長さは東約三十間（約 55 m）・北約四十間（約 73 m）・西約二十四間（約 44 m）で、それぞれの土塁の中央部は鞍状に低くなっており、東北・西北のそれぞれの隅には櫓があったと考えられる。土塁に囲まれた屋敷は東西約二十七間（約 49 m）・南北約二十二間で桑畑となっている。堀跡は明確で屋敷を四周し、東堀の幅約三間（約 5.5 m）・

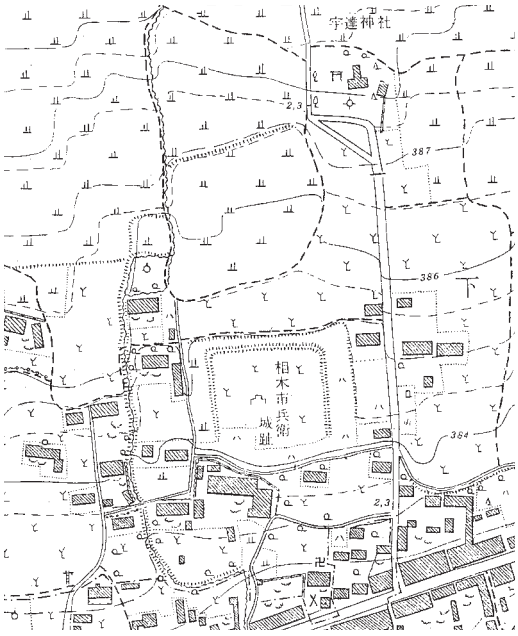


図 3　相木城跡（T15 測量・S27 修正）

北堀約四間・西堀約五間・南堀は約三間である。堀の深さは土塁の高さからみて二間近くある。屋敷堀は埋められて桑畑となっている」と記されている。昭和 28 年撮影の航空写真にも南を除く三方を土塁がきれいに取り囲む様子が確認できる（写真 5）。

旧公図からの検討では（図 4）中心屋敷跡が堀跡の細長い水田と土塁跡の細長い畑に取り巻かれる方形の土地とみとめられ、土塁跡と思われる畑がきれて水田が入り込む北東隅と南東隅が入り口とみられる。この館の北側は水田となるが、居館跡周囲の宅地や畑地が方形に取り囲むようにみうけられ、外堀の有無は不明ながら回字型になるのかもしれないとされている（市川隆之　2003）。

現状で相木城の痕跡は旧学校敷地入り口東脇にわずかに土塁と堀の痕跡が残されているにすぎない（図 13、写真 6・7）。

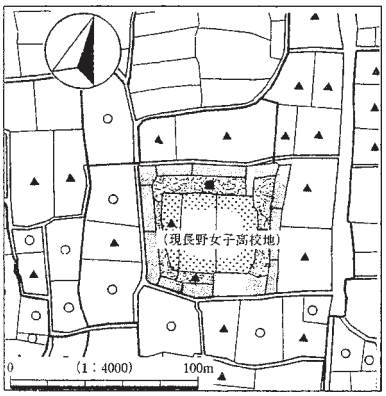


図 4　旧公図に見る相木城跡
（市川　2003　より）

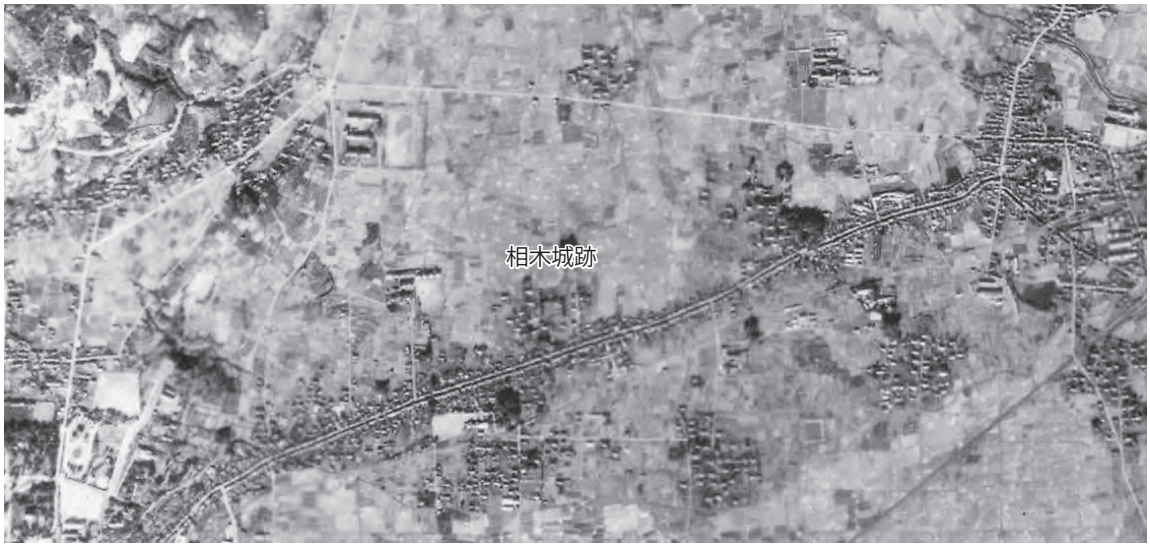


写真 5　昭和 28 年撮影航空写真

写真 6　土塁・堀痕（南側）

写真 7　土塁・堀痕（東側）

第３章　調査成果

第１節　調査概要

遺構確認面まで重機による表土掘削を行ったが、相木城跡に関する中世遺構面の確認が困難で作業は難渋した。調査地の旧地形は北西から南東へ向けての緩斜面をなしており、調査区北西では現地表下 40 cm ほどで地山面が露出したため、全面にわたって遺構検出作業を実施し、部分的にトレンチ調査を実施したところ、中世の遺物包含層及び遺構面は長野女子高建設時にすでに削平されていることが判明した。遺物包含層は地形の傾斜に沿って南東へいくほど厚みを増し、遺物の包含量は少ないものの、平安時代から弥生時代の土器片が検出されたため、中世の遺構確認は断念し、平安～弥生時代の遺構確認を目指して調査を継続した。

中世に関する遺構としては礎石建物址１棟を検出したが、礎石の規模等から判断するに相木城跡とは時代の異なる中世末以降の建物と想定される。このほかに検出された遺構としては、弥生時代住居址１軒、古墳時代住居址１軒・土壙１基、平安時代掘立柱建物址１棟、中世末～近世礎石建物址１棟、時期不明井戸址１基・土壙８基・柱穴多数がある。

当初存在を想定した中世遺構面の下層より、弥生時代～平安時代にかけての遺構を検出しているが、遺構の密集度は低く、第１次調査で検出された集落跡の南端付近に位置するものと想定される。

写真８　調査風景

図５　調査区全測図（1：150）

図６　土層柱状図

第２節　遺構と遺物

１号住居址

弥生時代後期・箱清水式期の住居址で、北側は調査区外となり、上層を１号土坑に、南側を１号掘立柱建物址に切られる。住居址の規模は短軸で 5.05 m を測り、長野女子高校校庭遺跡の１次調査の検出遺構から類推するならば、長軸は 7.0～10.0 m 程度の大型の長方形住居址と想定される。

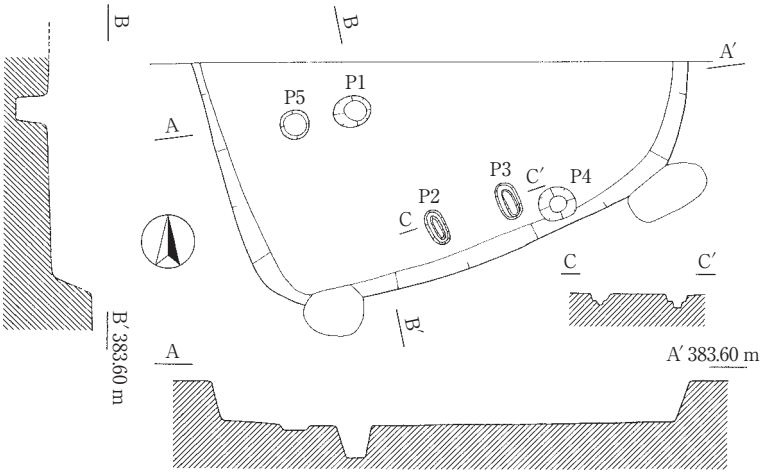


図７　１号住居址実測図（1：80）

検出された主柱穴は P1 のみで、深さ 31.8 cm を測る。P2・P3 は出入口施設の梯子受け穴で、深さはそれぞれ 10 cm・14 cm を測る。P4 は出入口施設に付随するピットで深さ 36 cm を測る。検出面からの掘り込みは深く南壁で 38 cm、西壁で 41.7 cm を測る。床面は壁際を除き全体に堅緻な状況であった。

本住居址は焼失住居で、床面直上からは炭化材・炭化物が集中して検出され、床面の一部ならびに壁面全面には被熱硬化面が確認された。出土土器も少なく（図 12　1～3）、炭化材・炭化物の検出状況や床面・壁面の被熱硬化状況は、住居機能の停止直後に火入れがなされたことを想定させる。同様の焼失住居址は第１次調査地点でも７軒検出されており、この住居址が本遺跡における弥生時代後期集落の南端付近に位置することを想定させる。

写真９　１号住居址

写真 10　1 号住居址炭化材検出状況

写真 11　1 号住居址覆土堆積状況

写真 12　1 号住居址出入口施設

2 号住居址

調査区西側で検出された住居址で、他遺構との切りあい関係はない。長軸 3.80 m、短軸 3.20 m の長方形住居址で、検出面からの掘り込みは 10～20 cm ほどと浅く、床面も軟弱で不明瞭なものであり、一部は下層の礫層が露出する状況であった。北壁側中央部分に径 85 cm ほどの円形の炭化物と灰の堆積が確認された。地床炉に伴うものであることが想定され、カマド導入以前の古墳時代中期の住居址と判断した。多数の柱穴が検出されているが、いずれも後代の掘り込みで、本住居址に直接伴うと判断されたものはない。

明確に時期を特定できる土器は出土していないが、提砥が 1 点出土している（図 12　13）

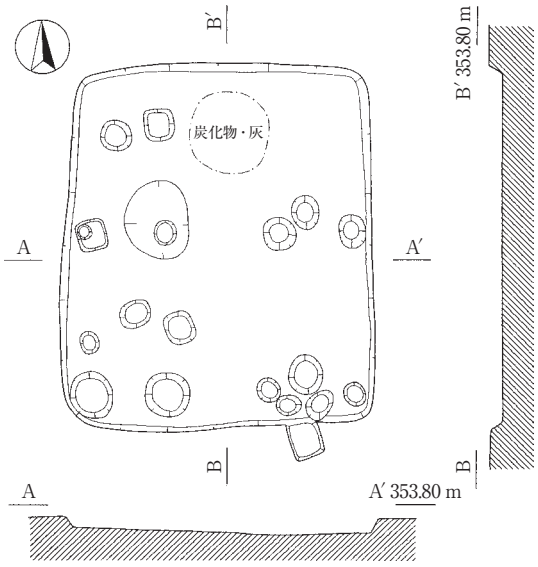


図 8　2 号住居址実測図（1：80）

写真 13　2 号住居址

1号建物址

調査区南西で検出されたもので、東西方向6間の礎石建物址と想定される。南側は調査区外となり、南北方向の詳細は不明。

礎石の芯々間距離はP1-P2間・P5-P6間が約2.0 m、P3-P4間・P4-P5間が約2.25 mであり、地山の礫層が露出している部分に確認できなかったものの本来はもう一つの礎石があったものと想定される。

礎石掘方の形状は方形（P1・P2・P4・P5）と長方形（P3・P6）の二つがある。礎石はいずれも平坦な自然石を用いており、大きさは径20 cmほどのP6を除き、いずれも40×30 cm程度である。

時期決定の根拠となる明確な遺物は出土していないが、礎石規模の大きさから中世末～近世の建物址と想定している。

2号建物址

弥生時代後期の1号住居址を切って構築される。桁行2間・梁行1間の計6基の柱穴から成る掘立柱建物址でその形状は方形を呈する。

桁行3.70 m、梁行3.50 mを測り、桁行の柱穴間の距離は1.70～1.90 mを測る。各柱穴は概ね長方形ないし楕円形を呈し、その規模は長軸60～85 cm、短軸40～50 cm、深さは35～56 cmを測る。

時期決定の根拠となる遺物は出土していないが、平安時代の掘立柱建物址と想定している。

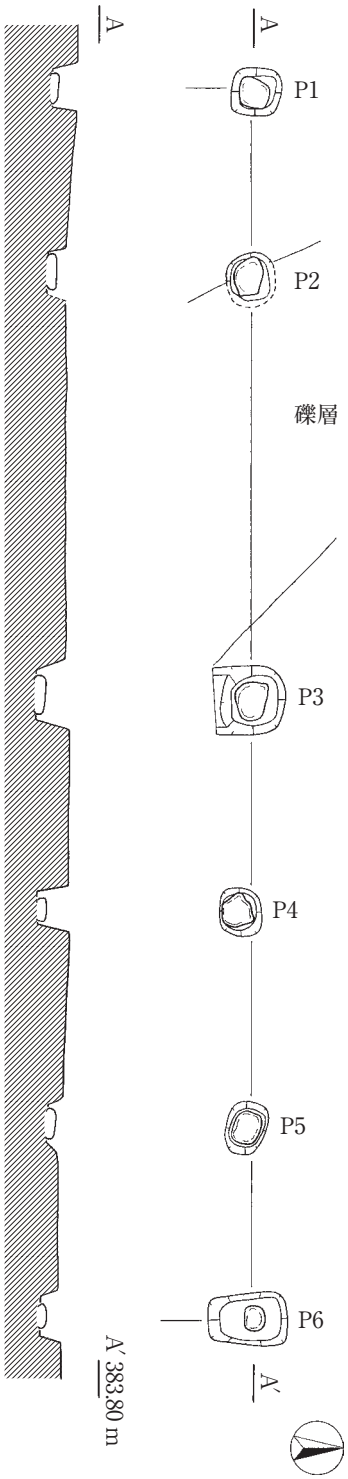


図9　1号建物址実測図（1：80）

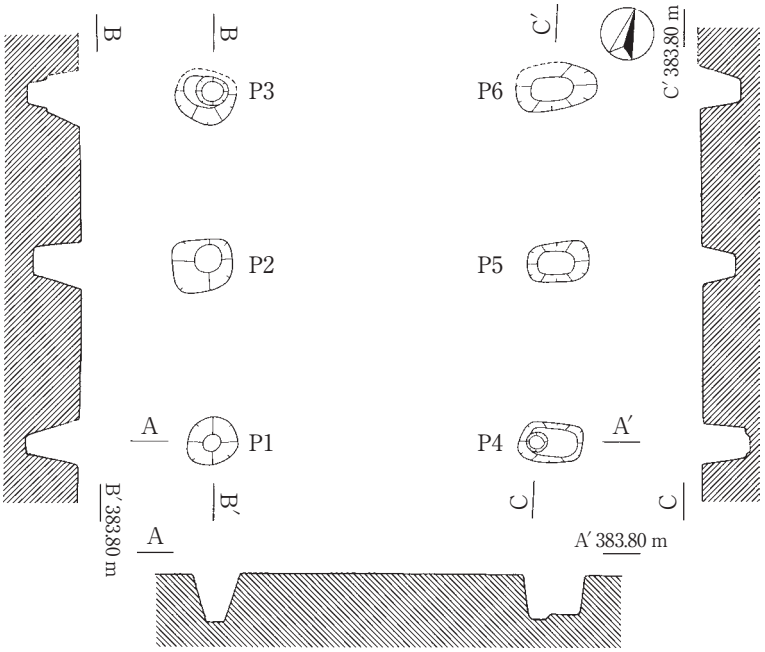


図10　2号建物址実測図（1：80）

写真 14　1 号建物址礎石検出状況

写真 15　2 号建物址

写真 16　1 号土壙

1 号土壙

長軸 2.00 m、短軸 1.45 m の長方形土壙。1 号住居址上層に構築され、北西隅は一部攪乱を受ける。覆土は炭化物を混じた淡茶褐色の砂質土で他の遺構とは明確に異なり、中世の土壙の可能性も考えられたが、出土土器はなく時期不明。床面から若干浮いた状況で凹石 1 点（図 12　14）を含む人頭大～拳大の集石が検出されているが性格は不明である。

2 号土壙

1.00×0.80 m の不整円形を呈する。二段にわたる掘り込みをなし、深さは 18 cm。

3 号土壙

1.10×0.90 m の長方形を呈する。深さ 9 cm。

4 号土壙

0.55 m ほどの方形もしくは長方形土壙。深さ 16 cm。1 号土壙同様の覆土で中世の土壙である可能性が考えられる。

5 号土壙

1.00×0.90 m の不整円形を呈する。深さ 19 cm。覆土中位に 10～20 cm 程度の石が集中して検出されているが性格不明。

6 号土壙

径 1.50 m の円形の井戸址。7 号土壙を切る。深さ 1 m ほどまで掘削したが完掘はしていない。井戸側は無く

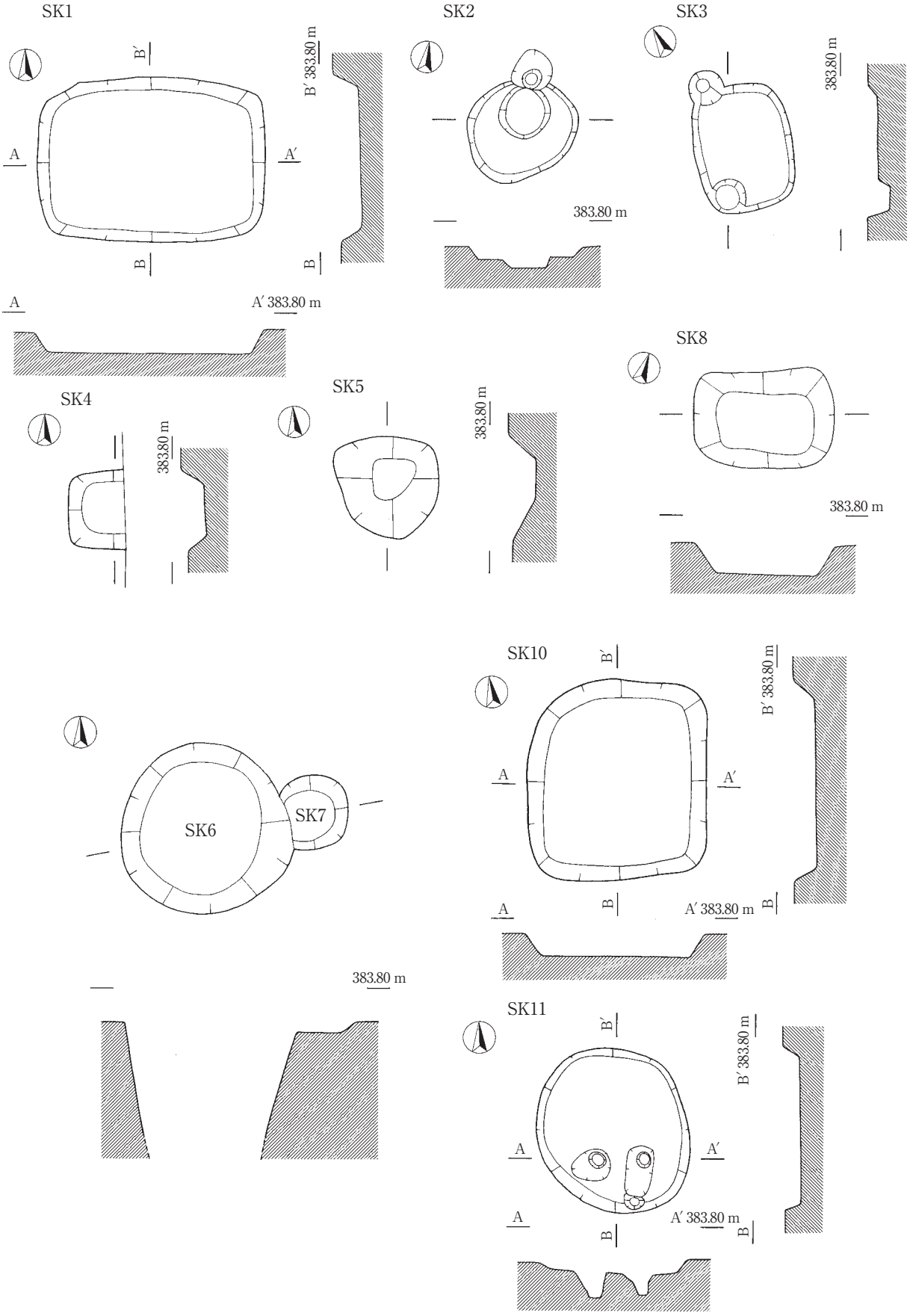


図 11　土壙実測図（1：50）

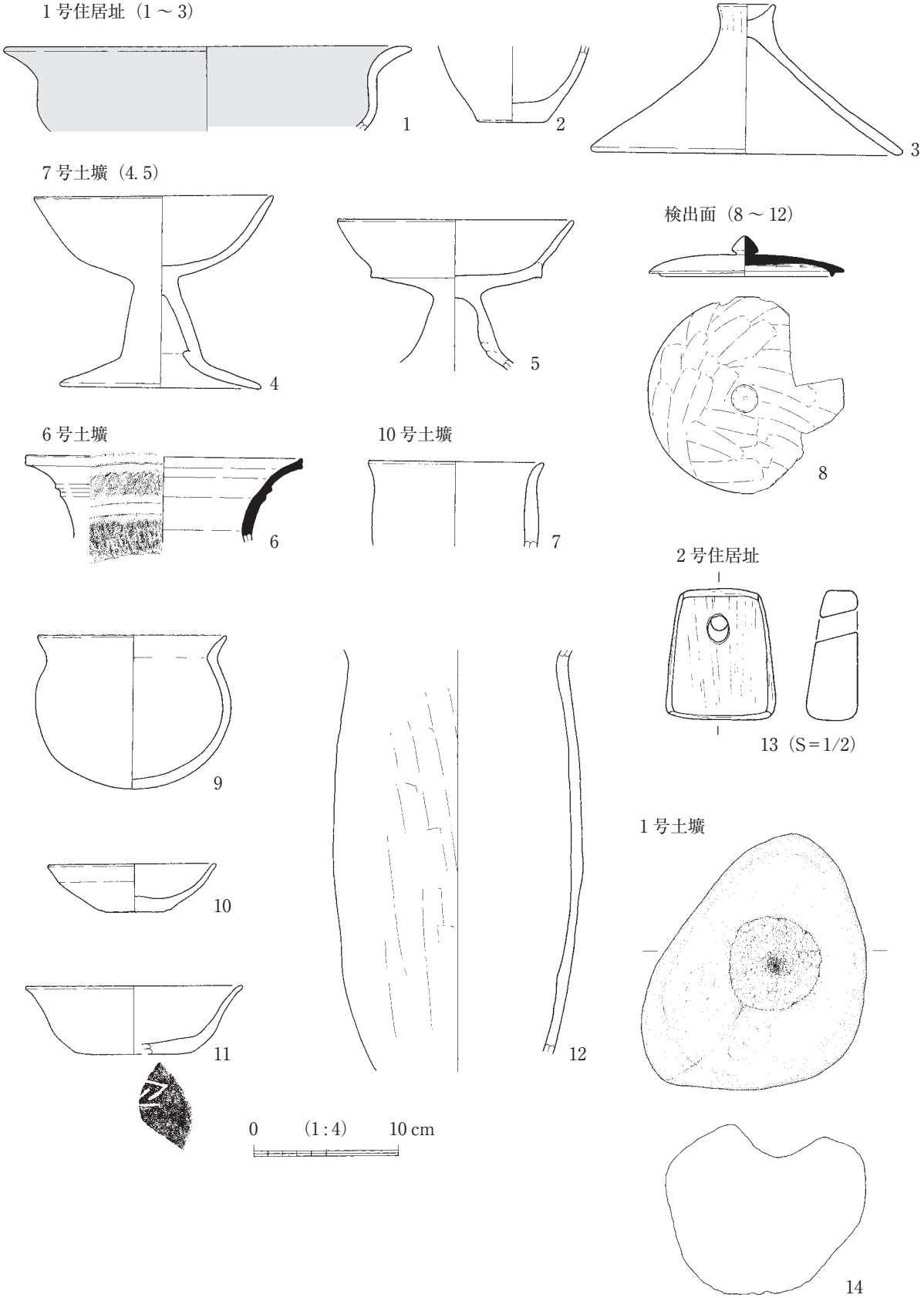

1 号住居址（1 ～ 3）
1
2
3
7 号土壙（4. 5）
4
5
検出面（8 ～ 12）
8
6 号土壙
6
10 号土壙
7
2 号住居址
13（S＝1/2）
9
10
11
12
1 号土壙
14
0 （1 : 4） 10 cm

図 12　出土遺物実測図

素掘りの井戸である。時期決定の根拠となる遺物は出土していない。

7 号土壙

径 0.65 m 頬の円形土壙で 6 号土壙に切られる。深さ 10 cm ほどであるが、底面に接して高坏型土器が 2 個体横転した状態で出土している（図 12、4・5）。古墳時代中期。

8 号土壙

1.25×0.85 m の長方形土壙。深さ 25 cm。

10 号土壙

1.75×1.55 m の長方形土壙。深さ 19 cm。

11 号土壙

1.45×1.30 m のやや不整な円形土壙。深さ 10 cm。

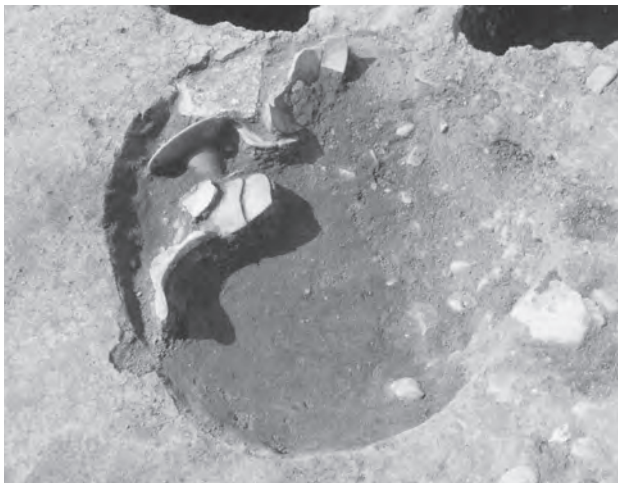


写真 17　7 号土壙土器出土状況

第 3 節　調査のまとめ

今回の調査では弥生時代後期住居址 1 軒、古墳時代住居址 1 軒・土壙 1 基、平安時代掘立柱建物址 1 棟、中世末～近世礎石建物址 1 棟、時期不明井戸址 1 基・土壙 8 基・柱穴多数を検出した。中世の包含層は長野女子高校舎建設時にすでに削平されており、残念ながら相木城跡に直接かかわる遺構・遺物は検出されていない。

弥生時代後期も古墳時代もそれぞれ 1 軒の住居址が検出されたのみであるが、両時代ともおそらく長野女子高校校庭遺跡の 1 次調査で検出された集落の南端付近に位置するものと想定される

長野女子高は、今回の調査地に存在した旧校舎を解体して、グラウンドに新校舎を建設したが、その新校舎建設予定地の調査が 1 次調査で、平成 24 年に調査を実施した。調査面積は 2,570 m^2 である（図 13・14）（長野市教委　2014）。

検出された竪穴住居址は総数 48 件で、その内訳は弥生時代後期箱清水式期 26 軒、古墳時代中・後期 19 軒、時期不明 3 軒であった。遺構の密集度は高く、弥生時代も古墳時代も集落の中心付近が検出されているものと想定され（図 14）今回の調査地はその集落の南端付近に位置するものと考えられる。

弥生時代後期の集落からは法仏式～月影式古段階に比定される北陸系土器が多量に出土しており、近接する本村東沖遺跡で検出された同時期の大規模集落にきわめてよく似た状況を呈している。

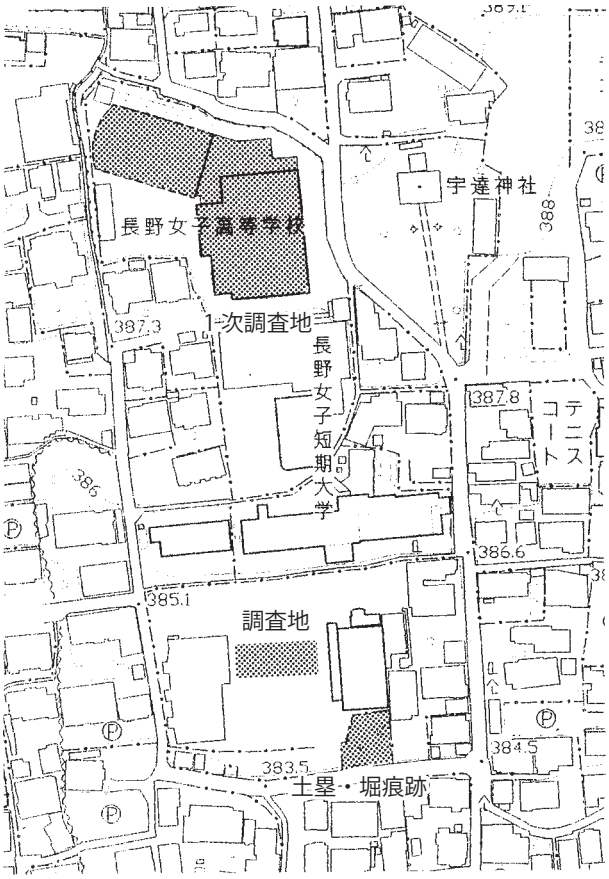


図 13　調査区位置図（1：2,500）

今回の調査で検出された１号住居址は焼失住居で床面の一部や壁面全面にわたって著しい被熱硬化状況が認められた。同様の焼失住居は１次調査においても７軒検出されており、調査者は住居の機能停止直後に火入れが行われたことを想定している。この時期の焼失住居は本村東沖遺跡や檀田遺跡でも確認されているが、いずれも炭化材が焼け落ちたような状況で検出されるものの、本遺跡にみられるような極端な被熱硬化状況を呈するものは、少なくとも浅川扇状地遺跡群内にては確認されていない。こうした尋常ではない焼失状況の背景にあるものは現在のところ不明というほかはないが、少なくとも焼失住居の新たな類型として把握すべきものと考える。

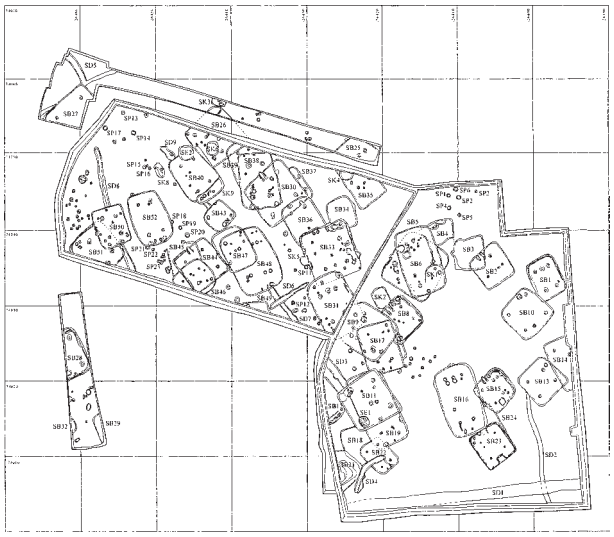


図 14　１次調査・調査区全測図（1：1,000）

古墳時代中・後期の集落はその規模は遜色ないものの、隣接する本村東沖遺跡とは大きな相違を見せる。古式須恵器を大量に保有し、滑石製模造品の製作工房や子持勾玉などの特殊な祭祀具を保有する本村東沖遺跡に対し、１次調査で検出された集落は特殊な遺構・遺物を持たないばかりか、古式須恵器すらほとんど所有しないという点で、改めて本村東沖遺跡の特殊性を際立たせる調査となったものといえる。

引用・参考文献

市川隆之 2003「第３編第１章第２節　長野市の居館跡」『長野市誌』第 12 巻　資料編　原始・古代・中世

久保田廣志 1997「第４章三輪」『長野市誌』第８巻　旧市町村史編　旧上水内郡・旧上高井郡

長野市教育委員会 1980『三輪遺跡　付水内坐一元神社遺跡』長野市の埋蔵文化財第６集

長野市教育委員会 1987『三輪遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 20 集

長野市教育委員会 1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（3)』長野市の埋蔵文化財第 38 集

長野市教育委員会 1993『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（4)』長野市の埋蔵文化財第 49 集

長野市教育委員会 1993『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第 50 集

長野市教育委員会 1994『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡（5)・小島柳原遺跡群上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第 62 集

長野市教育委員会 1996『浅川扇状地遺跡群　吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6)・棗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第 75 集

長野市教育委員会 2004『浅川扇状地遺跡群　檀田遺跡（2)』長野市の埋蔵文化財第 105 集

長野市教育委員会 2014『浅川扇状地遺跡群　長野女子高校校庭遺跡』長野市の埋蔵文化財第 134 集

長野県埋蔵文化財センター 2017『浅川扇状地遺跡群　本村南沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 113

図 15　調査区西半全測図（1：100）

表 1　検出遺構一覧表

遺構名	時期	形態	規模	備考
1 号住居址	弥生後期	長方形	× 5.05m	焼失住居
2 号住居址	古墳中期	長方形	3.80 × 3.20m	提砥 1
1 号建物址	中世末～近世	方形	× 13.0m	
2 号建物址	平安	方形	3.70 × 3.50m	
1 号土壙	中世？	方形	2.00 × 1.45m	凹石 1
2 号土壙		不整円形	1.00 × 0.80m	
3 号土壙		長方形	1.10 × 0.90m	
4 号土壙	中世？	方形	× 0.55m	
5 号土壙		不整円形	1.00 × 0.90m	
6 号土壙		円形	径 1.50m	井戸址
7 号土壙	古墳中期	円形	径 0.65m	
8 号土壙		長方形	1.25 × 0.85m	
10 号土壙		長方形	1.75 × 1.55m	
11 号土壙		不整円形	1.45 × 1.30m	

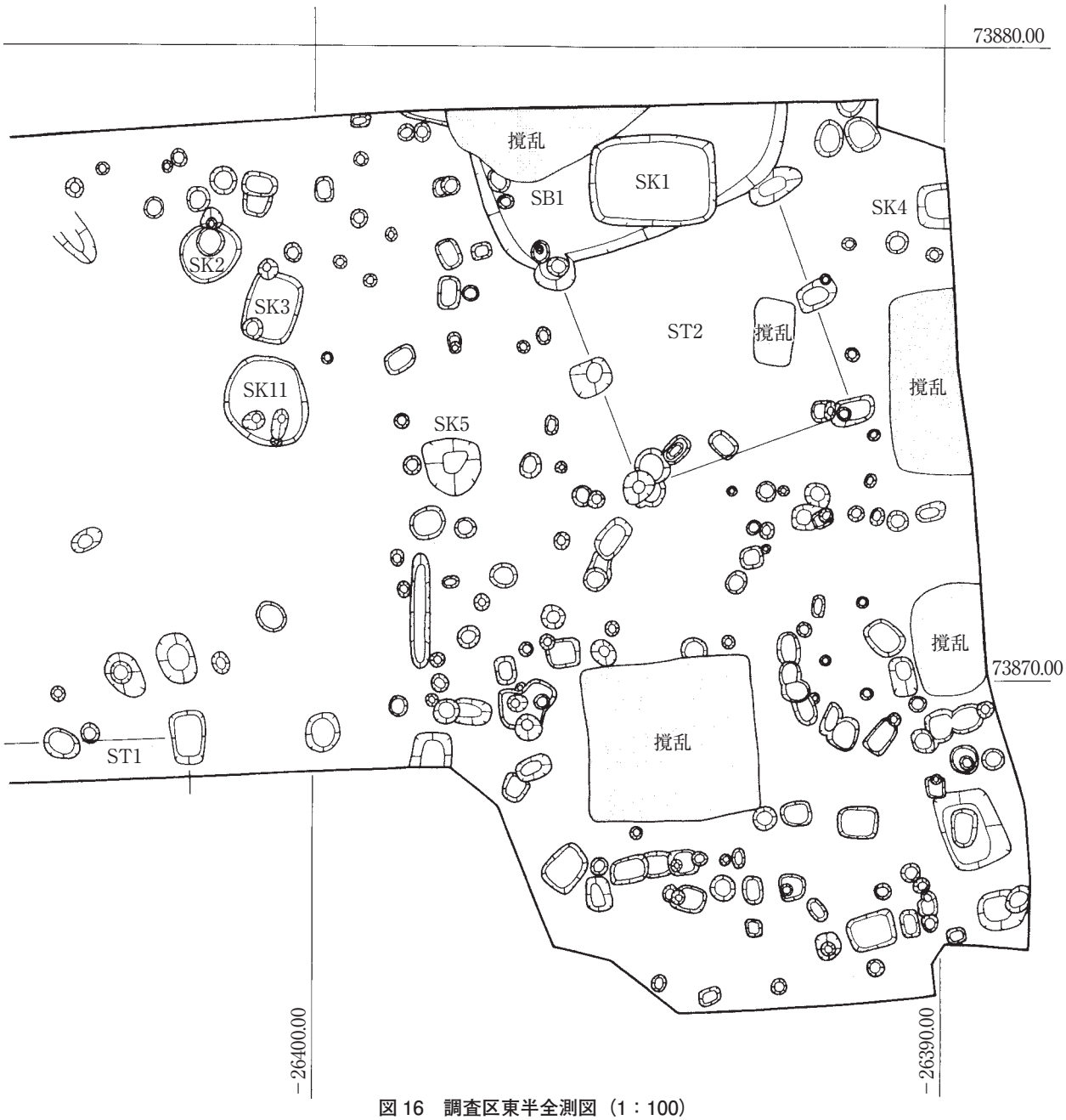


図 16　調査区東半全測図（1：100）

表 2　出土遺物観察表

No.	種別	器種	出土層位	法量			遺存度	調整・文様等	
				口径	底径	器高		外面	内面
1	弥生	高坏	覆土	28.0			1/3	ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩
2	弥生	甕	覆土		4.7		1/3	ヘラケズリ→ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ→ミガキ	ナデ
3	弥生	蓋	覆土	21.4		10.3	2/3	ハケ→ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ
4	土師	高坏	床直	16.4	13.8	13.4	3/4	ヘラミガキ	ヘラミガキ
5	土師	高坏	床直	16.2			1/3	杯部：暗文状の縦ヘラミガキ　脚部：ヘラミガキ	斜ハケ→ヘラミガキ
6	須恵	甕	覆土	19.0			1/8	口縁～頸部：波状文帯	ロクロナデ
7	土師	甕	覆土	12.0			1/4	摩耗詳細不明	
8	須恵	蓋		13.4		2.8	3/4	全体に手持ちヘラケズリ	ロクロナデ
9	土師	鉢		13.0		10.5	完	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラナデ→ヘラミガキ
10	土師	坏		11.6	4.0	3.3	1/3	ロクロナデ　回転糸切り	ロクロナデ
11	土師	坏		15.0	8.0	4.7	1/4	ロクロナデ　底部に刻書あり	ロクロナデ
12	土師	甕					1/3	ヘラケズリ	ヘラケズリ→ナデ
13		砥石					完		
14		凹石					完		

写真 18　調査区全景（左が北）

3

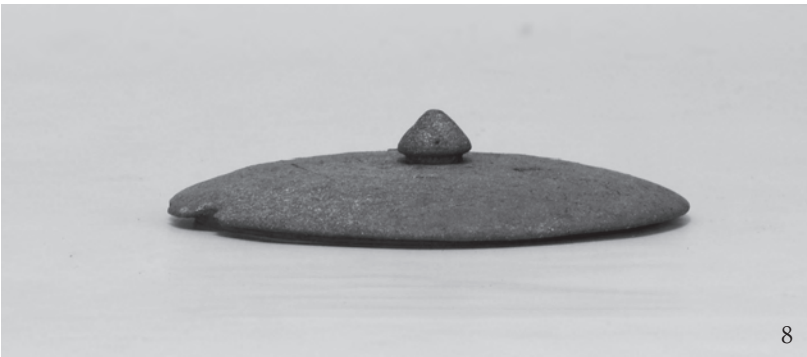
2

14

4

5

12


8

9

8

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　あいのきじょうせき・ながのじょしこうこうこうていいせき２
書　　名	浅川扇状地遺跡群　相木城跡・長野女子高校校庭遺跡（2）
副 書 名	学校法人聖啓学園長聖小学校新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 170 集
編集者名	千野　浩
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 381-2212　長野県長野市小島田町 1414 番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2023 年 10 月 1 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
相木城跡 長野女子高校 校庭遺跡	長野県長野市（ながのけんながのし） 三輪九丁目（みわきゅうちょうめ）34 番外（ばんほか）	20201	A-056	36° 39’ 55”	138° 12’ 16″	20220823 ～ 20221003	337 m^2	学校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
相木城跡 長野女子高校 校庭遺跡	集落跡	弥生時代	住居址　　1 軒	弥生土器	
		古墳時代	住居址 1 軒　土壙 1 基	土師器、提瓶 1	
		平安時代	掘立柱建物址　1 棟		
		時期不明	礎石建物址　1 棟 土壙 9 基		

要旨	中世遺物包含層は長野女子高建設時にすでに削平されており、相木城跡に直接かかわる遺構・遺物は検出されていない。弥生時代後期並びに古墳時代中～後期集落の南端付近を検出したものと想定される。

長野市の埋蔵文化財第170集

浅川扇状地遺跡群

相木城跡・長野女子高校
校庭遺跡(2)

令和5年10月1日　発行

発　行　　長野市教育委員会
編　集　　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　　大日本法令印刷株式会社